

## あけぼの会奨励賞

「妻が乳がんになったとき」

児玉 裕一郎 (こだま・ゆういちろう)

39歳／公務員／広島県

妻は、要らない紙を切って、札を貼るのが好きだ。ゴミを出す日には、「ごみ」という札が貼ってあったり、私が飲みで夜遅く帰ると「飲み過ぎないように」という札を貼られたりするところもあった。「札を貼ると忘れないから良いのよ」と妻はいう。

平成20年12月4日の朝、寝室から居間に入ろうとすると「病院」という札が貼ってある。その日は、子供の授乳中、胸にしこりがあるのに気づき、近くの病院で検査をしてもらっていたが、その検査結果を聞きに行く日だった。私はてっきり残ったお乳が固まっているのだらうと思い込んでいたため、あまり心配していなかった。昼頃、携帯電話に妻からメールが届いた。「大学病院で精密検査することになりました。」想像もしていなかった結果にショックは大きかった。その日の夜、検査結果が乳がんであることを妻から直接聞き、私は堪え切れずに涙が出てしまったが、妻は泣かなかった。「病気を治すんだ」という意志が、きりっとした瞳に現われていた。それから大学病院で精密検査をした結果、がんの大きさは3cm、腋窩リンパ節にも転移していることがわかり、まずは手術する前に6ヶ月間抗がん剤を投与し、がんを小さくしてから手術することにした。

私たちには、2歳の男の子と0歳8ヶ月の女の子がいる。子供は母親が病気であることはわかるはずもなく、毎日のようにぐずってダッコ、ダッコと泣きついてくる。妻は抗がん剤の副作用で体はしんどいはずだが、子供にはその姿を一切見せずに「お母さん、病気だからね。一緒に治るように祈ってね。」と笑顔でダッコに答えている。

妻ががんであること、子供が小さいため、がんの治療の間、仕事を休まざるを得ないときもあることを私の職場に伝えた。職場の上司や同僚から「仕事はみんなで助け合うから、安心して奥さんをサポートするように。」と励ましの言葉をいただき、とてもうれしかった。そのほか、両親や姉妹をはじめ、妻の職場の同僚や友人などからも、励ましの言葉をもらい、勇気付けられた。妻が病気になって悪いことばかりではない。皆の温かい、優しい心に触れることができたのだ。

妻は、現在、髪は抜け切り、抗がん剤の副作用と先の見えない不安とに闘っている。まだ治療は始まったばかりだ。これからどうなるか心配はつきない。鏡台に、妻の書いた札が貼ってある。「治るんじゃけ。信じて、安心して、笑って過ごそう。」この言葉に家族4人の思いが詰まっている。